

## ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (26)

ていたことをビレラ自身が書簡に記しており、二人が効力を失した裁許状の扱いを打ち合わせていたとしても不思議ではありません。その結果としてビレラが前述の全文訳を書いたと思われます。彼らにとって都合の良い文章にしたことの真意は二人以外にはわかりませんが、ビレラは義長の裁許状にない修飾の言葉を添えると共に、トルレスが山口を撤退した弁明の意味も込めてか、「特権を付与し」や「後継者に明瞭ならしめん」などの文言を加え、その約束が守られなかったことを暗に示唆するかのような内容にした可能性は否定できません。

この年、ビレラはポルトガル船が頻繁に来航するようになった平戸へ赴いて、10月28日(和暦十月七日)付けでこの地から書簡に添えて裁許状を発信したのです。それは、義長が自刃して七ヶ月後のことでした。

### ■『コインブラ版書簡集』の裁許状原稿は何

この裁許状を掲載した『コインブラ版書簡集』は、各頁にわたって見開きの右頁にあるノンブルのclxjからclxiijまで約6頁を使い、綴りに近い「のど」と「小口」部分を底辺にして、墨跡を基にした大振りな漢字が縦書きの十九行にわたって印字されています。しかし、これは空白部分がありながら単語が途中で改行されるなど不規則になっています。また、前述のようにその漢字単語毎の右側に級数を落としたポルトガル語活字で意味が付されています。(17頁の写真)

近年、東京大学史料編纂所によって刊行された『イエズス会日本書翰集』には、ポルトガル外務省文書館が所蔵する書状形式の三枚物の文書が「大内義長判物写」として写真で掲載されています。<sup>(7)</sup> この紹介は画期的なことで、『コインブラ版書簡集』ではわからなかった裁許状の姿が明らかになっています。そこからは、本文と差出人や宛名に相当する部分を含めて縦書きで十二行から成り、漢字が『コインブラ版書簡集』と似通っていることや、漢字単語に振られたポルトガル語訳がペンで書かれていたことなどがわかります。

両者の字体が類似していることからすると、同国外務省文書館の所蔵文書が同書の原稿になった可能性があります。しかし、この時期の書簡は海上輸送での安全性を確保する意味から三部程度作られていたとも言われており、<sup>(8)</sup> これを論拠にすると裁許状も同筆でビレラの書簡と同じ数の書写がなされ、別々の船で日本を離れ、時をおいてポルトガルへ到着していたと

も考えられるのです。

後の世になって、この文書を「現存する最古の邦文キリシタン文献<sup>(9)</sup>」と位置付け、研究者たちが多くの業績を挙げてきましたが、イエズス会内部の人間模様や印刷までの経緯など、未だ見えざる部分が興味深いところです。

### ■日本での鑄造活字印刷に繋がる

さて、『コインブラ版書簡集』は1549(天文十八)年から1566(永禄九)年にかけての日本通信の集大成とされています。特に、この時期に日本へ派遣されていたイエズス会宣教師はポルトガル人が多く、彼らが母国語で書いた書簡類は誤りの危険性を伴う翻訳の必要がなく、内容の正確さから重視されたのです。従って、ここに印刷された裁許状の文字を見たヨーロッパの人々は、異文化の国としての日本への認識を一段と深めたのではないのでしょうか。

一方、ヨハン・グーテンベルクによる鉛鑄造活字印刷術の発明から百年を経た時期に日本語漢字を印刷したイエズス会の技術は、巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが二度目の来日を果たした1590(天正十八)年に九州の加津佐へ印刷機を運び入れて刊行した、所謂「キリシタン版」の邦文書物の印刷へと繋がっていきます。

ちなみに、戦国期最大のキリスト教布教への理解者と見做される織田信長は、まだ尾張統一の途上にあって、ビレラが裁許状を発信した1557(弘治三)年の秋には、謀反を起こした弟信行を誅殺していたところでした。

#### 基本的な参考文献と註

- (1) 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』第3巻 平凡社(東洋文庫 581)1994年。197頁。
- (2) 村上直次郎訳・柳谷武夫編『イエズス会士日本通信』上巻 雄松堂(新異国叢書1)1968年。142-143頁。
- (3) 村上直次郎訳・柳谷武夫編 前掲書。142頁。
- (4) 河野純徳訳 前掲書20-21頁。
- (5) 五野井隆史著『日本キリシタン史の研究』吉川弘文館 2002年。109頁。
- (6) 東京大学史料編纂所編纂『日本関係海外史料イエズス会日本書翰集 譯文編之二(上)』東京大学出版会 1998年。244頁。
- (7) 東京大学史料編纂所編纂『日本関係海外史料イエズス会日本書翰集 原文編之二』東京大学出版会 1996年。巻末に補遺二号文書としての「大内義長判物写」と共に、現代活字への翻刻がある。
- (8) ヴァリニャーノ[著] 松田毅一[ほか訳]『日本巡察記』平凡社(東洋文庫 229)1965年。306-316頁。
- (9) 海老沢有道「大道寺」『日本キリスト教歴史大事典』所収 教文館 1988年。814頁。また、ここには日本語の翻刻がなされている。

おく まさよし(司書・事務長兼管理運営課長)